「雲仙温泉」の今と未来を語る 地域活性化座談会

石田(総)氏

（司会）まず、雲仙の魅力についてご説明を。

石田総　雲仙は古い歴史と、草花、野鳥、景色、「雲仙地獄」などの自然が豊富な、素晴らしい環境にある。この20数年間、観光客が落ち込んでいたが、昨年ようやく対前年比108％と、実績を残すことができた。

今後は点ではなく面で、島原半島、長崎県、西九州、九州全体と連携をとって、特に島原半島の世界ジオパークや世界遺産登録を目指すキリスト教関連遺産、日本一長い足湯がある小浜温泉などと連携して、地域一帯でPRしていかねばならないと考えている。

福田　旅館組合では、訪日観光客を取り込むために、昨年から雲仙市と、同じ市にある小浜温泉と共同で、韓国・ソウルへセールスに行っている。長崎空港とソウルの間にLCCのジンエアーが週3便飛んでいる。韓国とは1時間ちょっとと、大変距離が短い。

ジンエアーには、旅行客が航空券の半券を見せると、店などで割引や特典が受けられる「JINIパス」という制度がある。この制度に、日本で初めて島原半島も組み入れていただいた。雲仙の旅館や島鉄バスでは、このJINIパスを利用するお客さま向けのサービスを行っているところだ。

ジンエアーには、同社のホームページでも島原半島の紹介をしてもらっている。

旅館組合のもう一つの取り組みとして、新しいB級グルメ「雲仙ハヤシ」を開発した。明治、大正の頃、雲仙を訪れた外国人向けに、カツ丼のソースの代わりにデミグラスソースをかけた「洋風丼」というものをお出ししていた。それをじ市にある小浜温泉と共同で、韓国・ソウルへセールスに行っている。長崎空港とソウルの間にLCCのジンエアーが週3便飛んでいる。韓国とは1時間ちょっとと、大変距離が短い。

ジンエアーには、旅行客が航空券の半券を見せると、店などで割引や特典が受けられる「JINIパス」という制度がある。この制度に、日本で初めて島原半島も組み入れていただいた。雲仙の旅館や島鉄バスでは、このJINIパスを利用するお客さま向けのサービスを行っているところだ。

ジンエアーには、同社のホームページでも島原半島の紹介をしてもらっている。

旅館組合のもう一つの取り組みとして、新しいB級グルメ「雲仙ハヤシ」を開発した。明治、大正の頃、雲仙を訪れた外国人向けに、カツ丼のソースの代わりにデミグラスソースをかけた「洋風丼」というものをお出ししていた。それを今風にアレンジしたのが雲仙ハヤシだ。昔の時代に思いを馳せながら、あの頃のグルメを味わってもらいたいと、国立公園80周年を記念して開発した。今、雲仙の旅館や飲食店で提供している。将来的には、小浜温泉で有名な小浜ちゃんぽんとからめた企画も考えている。

雲仙市には有機栽培推進ネットワークという農家の組織があり、ここと連携して、お客さまに安心、安全の料理を提供しようと考えている。また雲仙市出身の著名な野菜料理研究家を呼んでの料理研究会も今年度行っている。

修学旅行については、これまでは先生方をお呼びしたり、旅行会社を訪問したりすることが多かったのだが、今は学校を直接訪問してのセールスに力を入れており、徐々に成果が表れている。

旅館で問題になっている耐震問題については、お客さまの安心、安全に向けて、最大限の努力をするつもりだ。

宮崎　われわれ「雲仙プラン100地域づくり委員会」は、来るべき国立公園指定100周年に向けて、中長期的な街づくりのプランニングと実行をするための組織で、今年で3年目になる。

宮崎氏

「半島連携」「景観整備・エコ」「自然活用街歩き」「総務」という四つの部会がある。半島連携部会は、島原半島内の連携促進と、一体となった街づくり、景観整備・エコ部会は自然のさまの安心、安全に向けて、保全と活用、自然活用街歩き部会は滞在型観光地を目指すためのコンテンツの開発、総務部会は住民の皆さんへの情報発信を中心に行っている。

半島連携部会では今年、島原半島の「フェノロジーカレンダー」（1年間の自然と人の暮らしの流れを表しているカレンダー）づくりを行っている。

景観整備・エコ部会では、未来に残したい雲仙の歴史、文化、自然を観光客や地元住民に選定してもらい、「雲仙遺産」として認定する事業を行っている。

自然活用街歩き部会では、先ほど話に出た雲仙ハヤシに加え、地元の野菜を使ったサラダやスムージーなどのヘルシーメニューを開発する事業を行い、すでに旅館やレストランで提供している。街歩きについては、早朝の雲仙を歩くノルディック・ウオークのガイド付きツアーを今年から始めたところだ。今、夜の雲仙地獄を歩く「地獄のナイトツアー」が好評だが、朝、夜の両方で滞在型のコンテンツができている状況だ。

総務部会では地域住民に向けて「雲仙ING」というペーパーを年4回発行し、われわれが行っていることについて情報発信をしている。さらに旅館のスタッフ向けのおもてなし研修も行っている。

石田真　雲仙青年観光会では先ほどお話しした街頭宣伝、エコタツに加えて、春には「つつじ祭り」というイベントを行っている。これらのイベントは単発で終わらせるのではなく、うまく連動させるような取り組みを昨年から行っている。昨年のつつじ祭りでは「山ガールのファッションショー」を行ったのだが、硫黄泉ならではの独特の香り、入浴した後の肌のつるつる感など、雲仙の温泉は本当にいいな、と改めて思った。専門家の方も美肌効果を認めているようで、そういう意味では女性の方に楽しんでいただける温泉地だと思う。

温泉街にある雲仙地獄も、自然の息吹、火山の営みを肌で感じられる、魅力人のあるところだ。

そして日本で初めて国立公園の指定を受けたり、外諫早で育ったのだが、子供の頃の雲仙のイメージというのは、山を登るとだんだん硫黄のにおいがしてきて、湯煙が見えて、赤い屋根の建物がぱっと広がってくるという様子。今、雲仙のような、雰囲気のいい温泉地は全国でも少ないのではないか。

個人的な感想だが、雲仙といえば、ちょっとよそ行きの服を着て行く場所。いい意味で敷居が高いというイメージがある。そういういい雰囲気を残していきたいと思う。

■　■

――観光活性化に向けて、それぞれ取り組んでいることは。

石田総　観光協会としては、旅館・ホテルだけでなく、地域のレストランや商店にもいい影響が出るようにと、さまざまな取り組みを進めている。まず、雲仙の魅力を最大限に伝える手段として、観光協会のホームページを8年ぶりに全面リニューアルした。旅館・ホテルはもちろん、民宿や飲食店、商店などの情報も体系的に網羅した。

さらに時代の流れに合わせて、スマートフォン専用のホームページも作成した。フェイスブックなどのSNSも活用して、雲仙観光の最新かつ有効な情報を常に発信している。

ホームページへのアクセス数は、多い日は従来の10倍にも達している。レストランや商店の方も、ネットを見て来たというお客さまが増えたと言っており、おおむね好評だ。

また、空港からのアクセス改善に向けて、雲仙市と一体で、県や国への陳情などを行っている。

雲仙は夏でも1日の平均気温が22度と、とても涼しい。学生の勉強合宿やスポーツ合宿にも最適だ。これらの獲得に向けて、施設の整備など受け入れ態勢をさらに充実、強化していく。

島原半島全体が連携
元祖VJCの温泉地

石田（総）

福田

石田（真）氏

石田（真）

宮崎

柿本

立石

温泉・観光地のさらなる活性化へ―議論を交わす各氏

ウオーキングやグルメなど新しい観光魅力も続々誕生

雲仙ガイド「さるふぁ」の佐々木雅久さん（左端）。温泉街や自然を案内してくれる

雲仙普賢岳のトレッキング。最近開通した新登山道は平成新山を間近に見る絶景ルートだ

2本のポールを使って歩くノルディック・ウオーク。地元在住の指導員が歩き方を指導してくれる

雲仙の地に代々伝わる雲仙焼。ギャラリーを併設した窯元では陶芸体験ができる

温泉水を使って焼く「湯せんぺい」は雲仙の名物。店ではその手焼き体験もできる

「雲仙ハヤシ」。地元野菜を使ったサラダ、スムージーとともに新しいご当地グルメに

国立公園100周年に向けて

出席者（順不同）

石田総一氏　雲仙温泉観光協会会長（東園社長）
福田努氏　雲仙旅館ホテル組合組合長（雲仙福田屋社長）
宮崎高一氏　雲仙ブラン100地域づくり委員会会長（雲仙宮崎旅館社長）
石田真隆氏　雲仙青年観光会会長（ホテル東洋館常務）
柿本敏晶氏　長崎県企画振興部文化観光物産局観光振興課課長
立石寿裕氏　雲仙市産業振興部観光物産課課長

司会＝本社・森田淳

2次アクセスを整備
大学と街づくり協定
温泉を売る努力必要
お客さまに本物提供

柿本氏　石田（総）　福田　宮崎

↙　福岡や九州内であれば自家用車で来られる方が多いのだが、関西や首都圏からとなると、飛行機や新幹線で来られた後のアクセスが非常に重要になってくる。われわれは2次アクセスの整備にも少しずつ取り組んでおり、長崎～雲仙～熊本や、ハウステンボス～雲仙～大牟田を結ぶバスもバス事業者と連携して運行している。今後、長崎空港や諫早からの雲仙へのアクセス改善にも取り組んでいきたい。

今、長崎県では「ひかりと祈り光福（こうふく）の街長崎」というキャッチフレーズで集客をしている。長崎市では毎年冬にランタンフェスティバルが行われているが、雲仙でも、雲仙灯りの花ぼうろ」というイベントが同時期に行われている。これらのイベントを含めて、県内を周遊して楽しんでもらえるように、周遊型の観光というものに県としても力を入れていきたい。

インバウンドについては、今までの歴史を踏まえて東アジアからの誘致に力を入れてきたが、昨年あたりから欧州やタイ、シンガポールなど東南アジアからの誘致に力を入れている。欧米向けにはネットや旅行雑誌を使って情報発信し、県全体へのヨーロッパからの観光客は昨年、前年の約2倍に増えた。今後はキリスト教関係の素材が訴求力があると思うので、活用してさらに誘客につなげたい。

立石　市も県と同じで、地域づくりとPRの二つが大きな役割になっている。

地域づくりでは先ほど本課長がお話しされたり、単に補助金を出すうだけではなく、企画を進める段階からできるだけ地域の皆さまと一緒になって考えていこうという姿勢で観光地がたくさんある。例えば国見町には神代小路（こうじろうじ）という、江戸時代にタイムスリップしたような一角がある。ここではガイド組織が最近立ち上がったところで、官民が一緒になって知恵を出し、意見交換を重ねてきた成果と思っている。温泉や自然とともに観光客の方に楽しんでもらいたいと考える。その誘致にも力を入れている。

立石氏

PRに関しては、待ちの姿勢ではなく、旅行会社の皆さんやマスコミの皆さんに、積極的に情報発信をしていく。特に、県の「ひかりと祈り―」キャンペーンともしっかりと連携し、「花ぼうろ」などのイベントも、さらに認知度を高めていきたい。本格的なインバウンドセールスはまだ始めたばかりだが、宣伝に加えて、現地のさまざまな情報をつかんでくることも大事な仕事なので、しっかり取り組みたい。

雲仙市にはコンベンションの補助制度もあり、会議やスポーツ競技などを行う団体に補助金を出している。その誘致にも力を入れる。修学旅行は少子化で絶対数が減っているのだが、若い頃に行った思い出は非常に強いもので、将来リピーターになっていただける可能性があるので、誘致については今後も続けていかなければならないと思っている。

■　■

――さらなる活性化へ、今後取り組むべきことは。

石田総　雲仙温泉は街並みのファザード計画がほぼ完了し、大変きれいな街並みになった。雲仙地獄をはじめ県、市一体となって進められている。

これからのテーマとしては、インバウンドの獲得と受け入れ態勢の強化。具体的に考えたことは、地元諫早の長崎ウエスレヤン大学との「観光まちづくり産学連携包括交流協定」の締結。宿泊施設やレストランでのメニューの多言語翻訳や、国別の志向性を反映した各種マップ作りなど、外国のお客さまがおいでになった時に少しでも支障のないようにと、今、進めているところだ。

またFITのお客さまに対応して、ブッキングドットコムやアゴダなどのネットエージェントと連携して、雲仙を世界に広くPRしてもらう仕掛けも考えている。海外の著名なプロガーを招き、雲仙のよさをPRしてもらう仕掛けも考えている。

長崎空港と諫早駅からの2次交通アクセスの改善も大きな課題として取り組まなければならない。

福田　JTB総合研究所が行った旅行者アンケートによると、雲仙のイメージはダントツで「自然にあふれる」で、それ以外の回答が非常に少なかった。「人とのふれあい」というのが一番に来る。これは何を意味しているかというと、われわれが温泉を売っていなかったということだ。もっと温泉というものを深く掘り下げて、プレゼンしないといけない。

アンケートではまた、雲仙の若い人からの認知度が非常に低いことも分かった。将来に向けて、シルバー世代や外国の人だけを追うのではなく、国内の若い人たちに、もっと雲仙を知ってもらうための努力が必要と考える。

また雲仙には地域の自然と歴史を紹介する「お山の情報館」という施設がある。ここにもっと訪れてもらうような仕掛けも必要だ。

雲仙温泉と小浜温泉の間に三十路苑（みそじえん）という紅葉の名所がある。ここに旅館ホテル組合でバスを仕立ててお客さまをお連れするツアーを今年から行う。夜のライトアップがきれいなところだ。11月24日から10日間を予定している。

インバウンドでは、旅館で働いている韓国人の従業員を講師とした韓国語の勉強会を月1回行っている。今後は中国語、英語などの勉強会も同様に行っていきたい。

福田氏

石田真　島原半島はスキューバダイビングを趣味とする人がホテルなどで多く定住して働いていると聞く。雲仙でも自然を活用した体験メニューをどんどん増やしていけば、若い人にももっと定住していただけるようになるのではないかと思っている。

雲仙には保養地として長い歴史がある。雲仙の魅力の一つとなっているが、この歴史を外に伝えるガイドの育成も必要だ。今、雲仙の自然を案内する「さるふぁ」という組織があるが、連携するなどして、ガイドのさらなる育成にも努めるべきだと思う。

柿本　今、旅行の形態が団体、グループから個人にシフトしている。外国人観光客のFIT化もさらに進むだろう。

そのような状況を考えると、自然や温泉といった個々の情報に加え、雲仙にはどんな楽しみ方があるのか、どんな過ごし方ができるのかという、より具体的な行動の提案をすることが必要になってくると思う。外国人用してもらったりと、街を回遊してもらう工夫、温泉街のにぎやかな雰囲気づくりが必要ではないか。

立石　先ほど福田組合長が言われたアンケート結果には、はっとさせられた。雲仙といえば、日本中誰でも知っている観光地というイメージだったのだが、若い人が意外に知らない。若い人がちょっと温泉に入りに行こうとか、山に登りに行こうかとか、そういう目的地になるように、われわれも努めなければならない。

それから観光業に携わる人は、おもてなしというものに当然、意識して取り組まれているが、一般の住民の方でも、観光客に対して道案内をするとか、ちょっと写真を撮ってあげるとか、そういったおもてなしが必要ではないか。地域全体のおもてなしの底上げというものを、行政としても力を入れてやっていきたい。

――最後に旅行業者らにアピールしたいことなど

福田　世界遺産候補のさらなる育成にも努めるべきだと思う。

柿本　今、旅行の形態が団体、グループから個人にシフトしている。外国人観光客のFIT化もさらに進むだろう。

そのような状況を考えると、自然や温泉といった個々の情報に加え、雲仙にはどんな楽しみ方があるのか、どんな過ごし方ができるのかという、より具体的な行動の提案をすることが必要になってくると思う。外国人観光客の意見が出る。島原半島で夏にとれる「走りダコ」を食のブランドに確立しようとか、記念写真の定番の場所となるような石碑を建てようとか。

ほかにも共通の課題として、若者の人手不足がある。働き手としてなかなか来てもらえない現状がある。

ただ、海のある地区ではスキューバダイビングを趣味とする人がホテルなどで多く定住して働いていると聞く。雲仙でも自然を活用した体験メニューをどんどん増やしていけば、若い人にももっと定住していただけるようになるのではないかと思っている。

雲仙には保養地として長い歴史がある。雲仙の魅力の一つとなっているが、この歴史を外に伝えるガイドの育成も必要だ。今、雲仙の自然を案内する「さるふぁ」という組織があるが、連携するなどして、ガイドから、最大限に生かすべきだ。旅館のロビーを宿泊客以外にも開放したり、レストランを宿泊客以外にも利用してもらったりと、街を回遊してもらう工夫、温泉街のにぎやかな雰囲気づくりが必要ではないか。

柿本氏

立石　先ほど福田組合長が言われたアンケート結果には、はっとさせられた。雲仙といえば、日本中誰でも知っている観光地というイメージだったのだが、若い人が意外に知らない。若い人がちょっと温泉に入りに行こうとか、山に登りに行こうかとか、そういう目的地になるように、われわれも努めなければならない。

それから観光業に携わる人は、おもてなしというものに当然、意識して取り組まれているが、一般の住民の方でも、観光客に対して道案内をするとか、ちょっと写真を撮ってあげるとか、そういったおもてなしが必要ではないか。地域全体のおもてなしの底上げというものを、行政としても力を入れてやっていきたい。

――最後に旅行業者らにアピールしたいことなど

福田　世界遺産候補の教会群とキリスト教関連遺産は、隣県の熊本県天草も含まれている。島原半島と天草は船で30分と近く、旅館組合としても、天草との連携を今後進めなければならない。

雲仙のおみやげは、今「湯せんぺい」ぐらいしかないので、何か目新しいものを開発したい。

雲仙の昔の風景を写した写真パネルがお山の情報館の別館に飾られているが、殺風景なところなので、いかんせんお客さまへのアピール度が弱い。旅館のロビーで飾ればイメージアップにつながると思うので、ぜひ、お願いしたい。

若者が集う温泉地に
もてなしの底上げを

石田（真）　立石

宮崎　雲仙には朝、夜の体験メニューができ、新しい登山のルートもできた。

効能豊かな温泉と豊富な自然体験メニューを、日本でもトップの癒やしの地雲仙で、ぜひ体験していただきたい。

石田真　旧暦の七夕に、街の灯りを消して星空を眺める「ライトダウン」というイベントを行った。100年前に外国人の避暑地だったころの雲仙の雰囲気を再現しようという試みだ。まだ、いろいろな可能性が残されていると思う。

「雲仙はこんな楽しみ方もできる」というものを、外部の人からもアドバイスをいただけるとありがたい。

柿本　長崎県には雲仙をはじめとした温泉や、歴史、文化、テーマパークなど、魅力がたくさんある。これだけ多彩な魅力がある県もなかなかないのではないか。

長崎は1泊では絶対に足りない。2泊、3泊ぐらいして、ゆっくり県内を回っていただきたい。平成28年にはJRのDCも行われる。それに合わせて雲仙の着地型観光の魅力もどんどんアップしていくと思う。全国の皆さんにぜひ、長崎県の観光に注目してもらいたい。

立石　旅行会社の方には、ぜひ、現地に足を運び、その土地の歴史、風土、人々の生活といったものに直に触れていただきたい。

島原半島の特徴の一つであるおいしい食材を、旅行商品化してもらいたい。夕食のテーブルに並ぶ料理の食材が採れる現場や、特産品の直売所を訪ねてもらったりすれば、物産の振興にもつながるので、ぜひ、お願いしたい。

温泉、自然、歴史…魅力の宝庫、高原リゾート「雲仙」

雲仙温泉街。三角屋根の瀟洒（しょうしゃ）な建物が軒を連ねる

雲仙観光のメーンスポット「雲仙地獄」。噴気孔から水蒸気がもくもくと噴き上がる

温泉街に近い景勝地・仁田峠と妙見岳山頂を結ぶ仁田峠ロープウェイ

古絵はがき（カバー）。雲仙のゴルフ場はわが国で最も古い歴史を持つパブリックコースだ

ダンスを楽しむ外国人たち。雲仙は明治・大正時代から外国人が多く訪れていた

雲仙地獄で温泉卵を買うヘレン・ケラー女史（右から2番目）。多くの著名人がこの地を訪れている